茶の字のはじめ

大原　良通

はじめに

漢字というのはご存知の通り、象形文字です。小学生の時に、「山」や「川」や「月」という漢字は、形をそのまま文字にしたものだと習いました。しかし、すべての漢字がそうではなく、数字や上下など形にしにくい抽象的な概念を文字化した指事、「日」と「月」をたして「明」にするなど二つ以上の文字をたして作る会意などがあります。そして「茶」という文字は 意味を表す文字と音をあらわす文字を組み合わせてつくる形声で『新字源』という漢和辞典には、「もと、茶と書いた。艸と、音符余（刺激する意→灼シャク）とから成り、にがな、ちゃの意を表したが、のちに茶と区別して、ちゃにはもっぱら省略形の茶を用いるようになった。」[1]とあります。「茶」は「茶」の省略形だというわけです。

「茶」字の初見

いつごろ「茶」から省略形の「茶」という文字ができたかといいますと、楊慎（一四八八～一五五九年）の書いた『丹鉛余録』に「陸羽の茶経、玉川の茶歌、趙賛の茶禁以後、ついに茶を以

て茶に易わる」とあります。つまり、「陸羽の茶経」と「玉川の茶歌」と「趙賛の茶禁」の後に「茶」という文字が「茶」にとってかわって使用されたと言っています。

陸羽（七三三～八〇四年）の『茶経』とは、説明する必要も無いほど有名な、茶についての最初の専門書で、七五八年ごろに書かれたといわれています。

「玉川（子）の茶歌」とは、陸羽とほぼ同時代の詩人、盧仝（不明～八三五年）のことで、茶に関する詩をいくつか残している人です。

「趙賛の茶禁」とは、『旧唐書』に

（建中）四（七八三）年に度支侍郎の趙賛が常平の事を議論して、竹・木・茶・漆すべてに税金をかけようとした。茶の税が有るのは、此にはじまる[2]。

とあるのを指し、茶に税がかけられることで、茶の個人的売買が禁止されたことを言っています。これらのことから楊慎は、七八三年ごろに「茶」という文字が使われ始めたのだとしています。

清代の学者の顧炎武（一六一三～一六八二年）は『音学五書』という本の中の「唐韻正」の「茶」の項目で、この楊慎の記事を引用した上で、

泰山岱嶽で唐の碑の題名を観覧した時、大歴十四（七七九）年に「茶薬」の字を、貞元十四（七九八）年に「茶宴」の字を刻んでいるのを見たが、どちらも「茶」の字であった。また李邕の『娑羅樹碑』・徐浩の『不空和尚碑』（七八一年）[3]・呉通微の『楚金禅師碑』（七八一年）[4]の「茶毘」の字、崔琪の『靈運禅師碑』の「茶椀」の字もまた「茶」を使用しており、その時

の字体はまだ変化していなかった。会昌元（八四一）年の柳公権書の『玄秘塔碑銘』・大中九（八五五）年の裴休書の『圭峰禅師碑』の「茶毘」の字はどちらも一画少なくなっているので、この字は中唐以後に変化した。

としていて、石碑に彫られた文字を利用して、「茶」という文字が「茶」に変化した年代を考察し、楊慎の説より少しおそい八四〇年ごろだとしています。

「茶」という文字がつくられた唐代は、まだ印刷技術が発達していませんから、本はみな書き写して読んでいました。したがって、もともと「茶」と書いてあってもそれが「チャ」の意味なら、写す人が気を利かせてかってに「茶」を「茶」と書き換えてしまう可能性があります。しかし、石碑は彫られた当時のままの字体が確認できますから、文字を考察する資料としては非常に適したものなのです。

「茶」という文字が現れる前は、「にがな」とともに「茶」という字であらわされていました。「茶」のもとになった「茶」という文字は、『説文解字新訂』という字書に、

茶とは「にがな」のことである。艸にしたがい余が音を表す。同 tong の子音 t と都 du の母音 u をたした tu という音である。徐鉉等は、この字は今の茶の字だ、と言っている。

とあります[5]。つまり草を示す草冠と、音を表す余から出来ているとしています。諸橋轍次の『大漢和辞典』は、郝懿行（一七五七～一八二五年）の『爾雅義疏』を引用し、

茶の陸羽が『茶経』を書いたときにはじめて一画を減らして茶という字を作り、今では茶と

いう字が知られていて、茶という字がもう忘れられている。

と述べており[6]、郝懿行は陸羽が『茶経』を書くときに作った文字だとしています。

少し、整理しておきますと、許慎（生没年不明）という人物が西暦百年に完成させ、最も古い字書とされている『説文解字』には、チャを示す「茶」という字は無く、「茶」に横棒の一本多い「荼」という字が「チャ」と「にがな」を示す文字として使われていました。それが、唐代になると「チャ」だけを示す文字が必要となり、陸羽が『茶経』を執筆したときに「茶」から横棒を一本抜いて「茶」という字をつくった、ということです。陸羽が『茶経』を書いたのは七五八年頃と言われており、石碑からも「茶」という文字はこの時代よりも少し後に使われ始めたことが証明されています。

陸羽が「茶」という文字を作ったかどうかはわかりませんが、彼は、「茶」に関する世界で始めての専門書、『茶経』の冒頭を、

茶は南方の嘉木である。

つまり、「茶の木は、（他の植物とは異なり）すばらしい木である」という有名な言葉で始めており、ショウガなどと混ぜて飲んではいけない、単独で飲むものであるというようなことを言っています。ですから、「茶」という文字は陸羽が作ったと言ってもよいくらい、他の植物とは区別して彼は「茶」を特別視しているのです。

「茶」字の日本伝入

日本で「茶」という漢字が最初に見られるのは、弘仁六（八一五）年四月のことで、このとき嵯峨天皇は滋賀の崇福寺で僧の永忠から茶をすすめられています[7]。これが、日本の歴史書における「茶」の文字の初出です。

永忠は、宝亀（七七〇年代）の初めに入唐し延暦の末（八〇〇年頃）に帰朝しています。彼は、中国で三〇年以上も暮らした入唐留学僧で、また嵯峨天皇は中国文化に傾倒しており、永忠が嵯峨天皇にお茶を献上したのは自然の成り行きだとされています[8]。

このことを記している「国史大系本」の『日本後紀』は「茶」ではなく「荼」という字を使っています[9]が、頁の上部につけられた頭注には、

「荼」という字は、もともとは「茶」となっており、今は「三條西本」にしたがう。

とあります[10]。「国史大系本」は「塙保己一本」を底本にし、それを最も古い写本である「三条西家本」を使って校訂したものです。

この「荼」という字ですが、頭注にあるようにもともと「塙保己一本」では「茶」という字が使用されていましたが、「三条西家本」は「荼」という字が使われていたので「茶」を「荼」という文字に直したのです。

『日本後紀』の成立は承和七（八四〇）年、今伝わっている最も古いものは「三条西家本」で、これには大永四（一五二四）年と天文元（一五三二）年の奥書があります。つまり、『日本後紀』

は最も古いとされている「三条西家本」でも、八四〇年から一五二四年まで七〇〇年近く手で書き写されてきたのです。その間、どれほどの人が関わったことでしょうか。したがって、『日本後紀』が書かれた八四〇年当時、もともとどちらの文字が使われていたのか、はっきりしたことはわからないのです。

私は、草書体の茶の字の上半分と共の字が似ていることから、『日本後紀』が書かれた当初は「茶」という字が使われており、写している間に誰かが上の部分を共と見まちがえて「恭」という文字にしてしまったのではないかと考えています。

「茶」の草書体　「共」の草書体

もし、この推測が正しければ、『日本後紀』が書かれた八四〇年にはすでに、日本に「茶」という文字が伝えられていたことになります。前述のように、中国で最も古い「茶」の字として確認されているのが、会昌元（八四一）年に作られた柳公権書の『玄秘塔碑銘』にある「茶」の字ですから、日本ではその一年前に「茶」の字が使われていたことになります。当時の日本がいかに速やかに中国文化を吸収していたかがわかります。

嵯峨天皇はお茶をお気に召したようで、同じ年の六月に畿内・近国に茶樹を植え、献上するよう

に命令しています。この時は、「槎」という字を使用しています。同時に頭注には、

もともとは槎となっており、今は「三條西本」にしたがう。

とあります[11]。この槎という文字は、漢字をほぼすべて網羅している『大漢和辞典』にも無く、中国で最も大部な辞典の一つである『漢語大詞典』にもありません[12]。しかし、『茶経』の割り注には『開元文字音義』にあるといいます。ただ『開元文字音義』は現存しておらず今となっては確認することが出来ません。おそらく当時の日本人は、植えたのは茶の「木」なので「槎」という文字を使用し、飲む「茶」と植える「茶の木」を文字の形からも区別しようとしたのではないでしょうか。残念ながら、この字は使われず、今では飲む「チャ」も「チャの木」も「茶」で表されています。

八一四年に嵯峨天皇の勅によって編纂された漢詩集『凌雲集』には、小野朝臣岑守の「序」に「秋柰（茶）翦繁。（秋には盛んに茶を刈る）」という文章があり、「茶」の字が見えます。

こうして見ると、中国で「茶」という文字が使用されるのとほとんど同じ時期に日本でも「茶」という文字が使用され始めていることがわかります。

「茶」字再考

「茶」には、例えば「茶毘（ダビ）」のように「ダ」という読みがあります。「茶」の字の草冠の下の「余」は「塗」「途」にも使われていて、「ト」という音をもあらわしていると考えられます。つまり、草冠で植物であることを表し、「余」で「ト」と言う音を示し、これらを組み合わせて「ト」という

名の植物を意味する形声文字となっています。同じように「茶」のことを示す「茗」という文字は、草冠の下に、その音である「名（メイ）」を合わせてできた文字です。

こうして「茶」という文字を見てくると、もともと「ト」という名前の植物をあらわす「茶」という文字から横棒を一本とって「茶」という字をつくり、この文字に「チャ」という音を当てはめたと推測できます。もし、この推測が正しければ、非常に恣意的につくられた文字だということになり、前述の郝懿行も言っているように、陸羽が他の植物と異なることを示すためにわざわざ考案した文字ではないかとも考えられます。陸羽は『茶経』の中で「チャ」のことを「南方の嘉木」だとしていますから、特別な木であって「にがな」のように草ではなく、「チャ」は木ですから「茶」から横棒を一本とって「木」に変えて、「茶」という新しい文字を作ったのかもしれません。

とにかく、この文字は陸羽によって広められたことには間違いありません。

陸羽が生きた八世紀から九世紀の初めにかけての時期は、茶を飲む習慣が唐帝国全土に広がり、それは貴族や僧侶だけでなく庶民にとっても日常欠かせない飲み物となりました。このことは前述したように七八三年に趙賛が茶に税金をかけたことからも証明できるでしょう。

こうした時代背景の中で、「チャ」に特別な文字を当てはめる必要が出て来たわけです。その文字は「茶」という、それまでも「チャ」をあらわしていた文字からつくられましたが、音は「チャ」となり、本来の音である「ト」ではありません。つまり、正確には字書でいわれているような、形声文字ではなく、非常に特殊な文字の成り立ちをもっているのです。

「チャ」を「嘉木」だとして、草ではなく木として扱い、また、それまではショウガなど、さまざまなものと混ぜ合わせて飲み、「にがな」をふくめた煮出して飲料にする植物をひっくるめて「茶」という文字であらわしていたのから、新たに「茶」という文字を作り出すことは、「チャ」は混ぜ物をせず単独で飲むべきものだと言う、陸羽が『茶経』で訴えている内容にぴったりと当てはまります。

「チャ」という読み

実は、「茶」字に関してはもう一つ大きな問題が残されています。「茶」という漢字が、八世紀の始めごろから使われ始めたことは、理解していただけたと思います。しかし、その読みである「チャ」という言葉が何時頃から使用され始めたかは、わかりません。つまり、「茶」という字が作られるまで、いったいどうやって「チャ」という音を記録して来たのか、その痕跡が無いからです。

中国には、

むかし神農が茶を食べたとき、茶の葉が彼の胃を検査するかのように動き、胃の中をさっぱりさせたことから、茶の葉が胃を検査するように動いたので「茶」は「検査」の「査」の字をとってチャと名付けられた。

という伝説があります。ひよっとすると、大昔には「査 cha」という文字が使われていたのかもしれません。また、唐代に広まった新しい飲料に対し新しい漢字を当てはめると同時に、また新しい

音をもつくりだして、この飲み物に名付け、唐代に新たに「チャ」という音をつけたのかもしれません。しかし、今となっては推測すら許されないほど、「チャ」という音と「茶」という文字はしっかりと結びつけられてしまっているのです。

今後、唐代以前から使用されている「茶」以外の「チャ」と発音する漢字で、明らかに茶のことを指している例が見つかり、その漢字が「茶」という漢字が出来る以前に「チャ」として使用されていたことが証明されれば、唐以前から「チャ」という音が存在したことが証明されますが、「チャ」という言葉が、唐以前から存在したのか、言葉も漢字も八世紀頃に新しく作られたものなのか、今後の研究課題となるでしょう。

おわりに

「茶」という文字は草冠と余からできてはいますが、余という文字はもともと存在せず、「茶」という文字を作るために「茶」という字から横棒を一本抜いて新たに作られた文字です。したがって、余という文字に「チャ」という音はありませんので、正確には形声文字ということが出来ません。つまり、新しい発想で作られた文字だということが出来るでしょう。こうして見てくると「茶」という文字から、新たなものを創作しようとする力強さ、新たな文化を生み出そうとする華やかさ、また、そういったものをどんどん受け入れて広めていく柔軟さ、さらに、それを外へ押し出す強力な国際力が見えてきます。それらはすべて、この文字が作り出された唐という時代を特徴づける要

素であり、「茶」という文字の中にはその時代を象徴する要素がぎゅっとつまっているのです。

私は「茶」という文字の形から、なんとなくそっけなく、またさわやかなイメージを見て取ります。それは、長大な中国史の華やかな一時代を抽象的に象徴する象形文字のようで、さらにその経歴を解き明かしていくと、まるで、何事にも執着しない飄々とした老人の充実した複雑な過去をかいま見るようで、まさしく、「茶」を飲むにふさわしい人は「精行倹徳（行いがすぐれており、ひかえめで徳のある）」の人なのだ、と陸羽が『茶経』で訴えた、その理想の人物を顕現しているように見えてきます。「茶」という文字自体が自己の複雑な来歴を押し隠し、何食わぬ顔を決め込んで涼しい顔をしているように見えるのです。

（本稿は神戸学院大学・人文学部研究推進費・研究課題「アジアにおける製茶技術の広がりと発展に関する研究」の成果の一部である）

注

1 小川環樹他編、『新字源』（角川書店、一九八四年、八五四頁）。

2 『旧唐書』巻四十九、「食貨下」（中華書局、一九七五年、二一一三頁）、「（建中）四（七八三）年，度支侍郎趙贊議常平事，竹木茶漆盡税之。茶之有税，肇於此矣。」。

3 陝西省博物館編著、『西安碑林書法芸術』（陝西人民美術出版社、一九八九年、三〇五頁）。

4 陝西省博物館編著、『西安碑林書法芸術』（陝西人民美術出版社、一九八九年、三〇五頁）。

5 臧克和・王平校訂、『説文解字新訂』（中華書局、二〇〇二年、五七頁）、「茶 tu2 苦荼也。从艸余聲。同都切。臣（徐）鉉等曰：此即今之茶字。」。

6 諸橋轍次著、『大漢和辞典』（大修館書店、一九八五年修訂版、九巻、五八三頁）。

7 『日本後紀』嵯峨天皇、弘仁六年四月条（吉川弘文館、一九五六年、一三二頁）。

8 熊倉功夫・筒井紘一他、『史料による茶の湯の歴史（上）』（主婦の友社、一九九四年、四六-四九頁）。

9 『日本後紀』（吉川弘文館、一九五六年、一三二頁）。

10 「槎、原作茶、今従三條西本。」。

11 「槎、原作榛、今従三條西本」。

12 『漢語大詞典』、（漢語大詞典出版社、一九九三年）。

編集後記

十一月に出す予定にしていたのですが、師走になってしまいました。初めてのことも多く、順調とはいきませんでしたが、桑島紳二氏から梅田印刷の中村隆氏を、北夙川氏からは銀聲舎出版會を紹介していただき、体裁を整えることが出来ました。

また、想像以上に多くの方から原稿をいただき、充実した内容となりました。

師走と言えば先生すら走るほど忙しい月という意味だそうですが、次年度の計画作成、後期試験作成、諸入試、卒論指導など、先生こそが忙しい月なんだと、自分自身に言い聞かせて走り回っています。せわしい時こそ、湯を沸かし、茶葉をポットに入れ、ティーコジーをかぶせて、ゆったりとお茶を楽しむ、ちょっとした贅沢ですが、そんな余裕が心を休ませる大事な時間を提供してくれるのではないでしょうか。

次号は、そんな時間のお相手にふさわしく、小説や漫画など、お茶がテーマのちょっとした楽しみをもう少し増やしたいと考えています。

（大原）

茶味　創刊第一号
編集　茶味の会
発行　銀聲舎出版會
和歌山県和歌山市和歌浦中二―十三―十五―一―二〇二
印刷　梅田印刷株式会社
東大阪市吉原二丁目四番八号